hanatorimura letter Vol.2　　fuki vibration

2017 春夏八ナトリムラ

花鳥村通信

〒８６１－１４４１熊本県菊池市原４４９０　Tel：0968-27-0212 Fax：0968-27-0206 正木ラビ

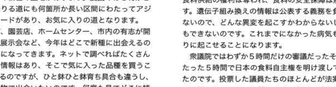
季節は巡り、立夏も過ぎました。新緑のお茶畑に清々しい風が吹き、森からは藤の花の甘い香りが漂ってきます。足下には、丸い葉っぱのフキたちが興奮せてなにか囁き合っているようです。しばらく揺んでいると群生しているフキの小宇宙に溶けてゆくような感覚になってゆきます。そんなキャラフキの季節。農園ではみりんとお酒お醤油でゆっくり煮含めるので、これまで簡易カマドを使っていましたが、改造中の納屋に韓国のストーヴ王子たちが作ってくれたカマドで炊いてみることにしました。思い返せば一年前の地震の時に避難していた納屋が、今年は生活の場に少しずつ変化しています。納屋には制作中のオンドル（韓国の床暖房）もあり、こちらは改良中なのでこの冬には使えるようになると思います。

水生動物のように水が好きな私は、川や温泉に入るとホッと安らげるのですが、薪ストーヴで暮らしているとは言え、これまで火を扱う事はあまり得意ではありませんでした。カマドの登場から羽釜でご飯を炊いたり、お味噌汁を作ったり火と向き合うようになりました。これにお漬け物と、山椒の佃煮や竹の子の味噌炒めやミツバの磯辺和えなど、春の幸が食卓に添えられます。火のある暮らし、台所からどんな物語が始まるのでしょう。

そうそう、先日馬に出逢いました。馬のことまだ何にも分からないけれど、草を食べている時の馬から野草のような波動を感じました。馬の側にいるとちょうどフキに囲まれている時のような静かでやさしい気持ちになりました。野草的動物。馬のこと、馬語についてもっと知りたくなります。

カマドで火を焚くことも、馬と暮らすこともはじめてのようでどこか懐かしい。どうやら花鳥村はそんな懐かしい未来の暮らしへと出航したようです。ぎこちなくて不具合もたくさんに思えるけれど、出たからには進もう。それは花の船かな。出航祝いに泉にはしゃくなげと紫陽花のガーランドを捧げたい。お花がいっぱいの村になりますように。植物も動物も人も安らかな村でありますように。

闇夜の森から聞こえる美しい鈴の音。その主を探しに森へと一歩足を踏み出すような不思議な旅が始まりました。　（ラビ）



泉鳥

清明の頃に寄り合うオの「先祖祀り」、いつもなら従が満開近くになっているのですが今年は三部咲きほどでした。十日間ほど遅いようだ。茶摘みもそれくらいは遅れるだろうと思っていました。それでも今年は運龍にあたることもなかったからか、八十八夜を過ぎた連休頃から茶に伸びやかに健やかに育ち、茶葉はとても綺麗でした。収穫が楽しみです。去年の今頃はまだ地震の余震が頻繁におり、茶摘み直前のつる取りをしていた時には茶畑全体が地面から大きく跳ねようたのを思い出しました。

この季節になるとワクワクしてくるもののひとつにアジサイの新種の登場があります。農園のあるわから市内に降りる道にも何厠所か長い区間にわたってアジサイ・ロードがあり、お気に入りの道となります。

物産館、園芸店、ホームセンター、市内の有志が開いている展示会など、今年はどこで新種に出会えるのか楽しみになってきます。ネットで調べればたくさんの新種の情報はあり、そこで気に入った品種を買うこともできるのですが、ひと鉢ひと鉢育ち具合も違うし、やはり実物で出会いたいのです。何度も見てどこに植わったら素敵かパッチリ見えた台買っています。

そうして才トラビ・ハウスの庭にハイドランジア系、ガクアジサイ系、ヤマアジサイ系、挿入りの葉のアジサイ、葉が黒いアジサイ、色味は青と白に濃い紫色、気がつけば珍しい品種が多くなりました。

母屋の前にはガクアジサイのクラデュエイションが格別の「コンペイトウブルー」、去年の茶摘み後八女の製茶園に行った帰り道に、知り合いの園芸店で衝動買いした黒葉で白い花だらがギザギザの「ゼブラ」。今年は花鳥村の関村記念と称して納屋の横にあるマザーツリーの庭に青色のガクアジサイ「泉鳥」という品種を植えました。

実に清楚な佇まいの品種で俵もちとは言えないほどでした。何ていう名前だろうと タグを見たら、「泉鳥」とありました。いずみ清き出る花鳥村にふさってつけでした。これはもう来ていただくしかないねえとうれしくなりました。

花鳥村はやっぱりお花が豊かでないとねとラビが最近頻ぞクを立ち上がました。大地に祈りとして花を植えることは、人間目線ではない自然目線を養っていくレッスンになるかもしれませた。それは生命平和へのクリエイションとなるのかも。

どんどん自嫌していく文明の流に飲み込まれることがないように、次なる文明のヴィジョンを見据え、自前的な暮らしから準備していきたいと思っているのですが、そもそもなお説後の火の粉は静かな奥山にまでどんどん飛んできます。

先日、「主要農作物種子法廃止案」が可決されました。種子法は戦、第、大豆の管理を都道府県に義務付け、原種を守りながら良い明見をかけてその土地の気候条件にあった品種改良を重ねてきました。日本人の体を支えてきた根幹です。これを廃止し、民間企業に預けるというのです。企業は種子を金儲けの材料にするため、遺伝子組み換え品種にし、特許をつけ権利を獲得し、食料支配好するでしょう。外資が参入すれば、食料供給の権利は奪われ、食料の安全保障は崩壊します。遺伝子組み換えの情報公表する義務を負っていないので、どんな異変を起こすかわからないし、調査もできないのです。これまでになかった病気も計画通りに起こせることになります。

熊議院ではずかも1時間だけの審議だったそうです。たった5時間で日本の食料自主権を明け渡してしまったのです。投票した議員たちのほとんどが法案の内容を理解できていないと聞きます。責任の重大さにも気づいてないのかもしれませな。本当に無知も極まったものだと嘆息せざるを得ませんん。

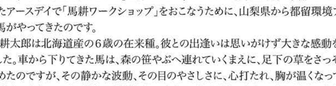
やがて農家は種の自家採取を禁じられ、種の価格を上げられ、販売網を封じられ絶の出されるのでしょう。田畑の環境も、遺伝子組み換え作物に必要とされる農薬の大量散布により、土と生態系は急激に悪化していくことと思です。

どうにかして小さな範囲でもいいから守らなければと思います。こんな状況は世界のあちこちでずすに起きてきたことです。それがついに日本にも襲ってきました。各地でみんな闘っています。インドではワンダグナ・シヴァさんたちがナワグニーナ農園で種を守る闘いをずっと続けてきています。僕たちもあきらめるわけにはいきません。

闘うというても相手は人間が作ったウザい欲望です。自然の環境を守る作業自体はいつもよることができがあります。なので、水を守ることも、種子を守ることも、木を植えることも、花を植えていくこともみんなつながくなる創造です。

いろんな技を持った人たちとアイディアを持ち寄ればきっと面白いことになっていくと思う。

口笛を鳴らす時だ。　（オト）



秋の『東アジア地球市民会議&花鳥村祭』が終わった日に、「来年は何をやりますか？」と訊かれて、「まず馬を飼うことかな」と答えました。そしてこの春、花鳥村で開催されることになったアースデイで「馬耕ワークショップ」をおこなうために、山梨県から都留環境フォーラムの馬がやってきたのです。

馬の耕太郎は北海道産の６歳の在来種。彼との出逢いは思いがけず大きな感動をもたらしました。車から下りてきた馬は、森の笹やぶへ連れていくまえに、足下の草をさっそく食べはじめたのですが、その静かな波動、その目のやさしさに、心打たれ、胸が温くなって、目に涙が滲んできたのです。何なのだろう、なつかしい、とてもなつかしい人に出会ったような気持ちで、すっかり馬に夢中になってしまいました。

それ以来ずっと馬のことばかり考えています。数日前に、いま住んでいる「もみの木の家」から斜め前に見える「厩想室」の下屋がそのまま馬小屋として使えることに気づきました。直径10mの馬場も手前の広場につくることができます。そんなふうに馬の家が決まったら、周辺のヴィジョンと今年やる仕事が一気に見えてきました。お茶室の南にこんもり繁っている杉林を、梅雨の間に巻枯らしします。それを冬に伐採してログハウスを作ろう。『花鳥緑学校』の校舎ができるまで……。そんなことまで考えながら杉林の南側の国有林に出てみたら、間伐をするとき作られた赤土の道がありました。どこまでゆくのだろう？

行き止まりまでその道を下りてゆくと、右手の谷からせせらぎの音がしました。よく見ると広葉樹の森のなかに小川が流れています。心引かれるままに谷間へおりてゆくと幅２m巾ほどの渓流の両側に石がしっかり積まれています。むかし、橋があったのです。その先に馬が通れるほどの古い道が下の谷へつづいています。岩が森除にならび、なんとお地蔵さんがひっそりと佇んでおられるではありませんか。こんなところに、こんなにすてきな場所があるなんて…。長いこと通る人もなく、忘れ去られていたのでしょう。大きな樹が繁り、清流がほとばしる、ほんとうに気持ちの良いところです。

ほこほこの柔らかな落ち葉にすわって目を閉じると、渓流の音と新緑の風に抱かれて、もう動けなくなってしまいました。しばらくたって目を開けと、前にそびえるケヤキの巨木が太い蔓に巻きつかれて苦しそうにしています。きっく締めつけられ、太い枝が何本か枯れています。どうやら木そのものが瀕死のようです。そこで鉈と鋸で太い蔓を切りました。そのときでした、谷の木々の枝葉がザワザワと鳴りはじめ、それからサーッと一陣の風が吹き、勢いをまして、ゴーッと音を立てながらしばらく吹き渡ったのです。光のように明るく至福にみちた風でした。まるで蔓に締めつけられて苦しんでさた樹が30年ぶりに思いっきりハーッと息を吐いたよう。きっとこれで木がよみがえることでしょう。

それから藪を払いながらしばらく上ってゆくと、テンプルから見える「亀の島」に出ました。そのまま道を登ると母屋の下です。この道をむかし毎日歩いて登ってきたという郵便配達夫の話を聞いたことがあります。車の道ができる前は、この道が村の入口だったのでしょうね。馬を飼うことになったので、馬が通っていた道がよみがえったのでしょうか。

馬といっしょに歩く子供たちの姿が見えるようです。　（正木 高志）

野も山も若葉の美しい季節になりました。

萌葱色に耀く木々の中、甘い香りの藤の花が、谷間に彩りを添えています。

みなさま、お元気ですか？　今年も新茶の時期がやってきました。

今年は4月22日のアースデイが花鳥村で開かれました。

なんと、そのメーンイベント「馬耕ワークショップ」に馬がやってきたのです。

感動したのは、馬の波動が静かで、近くにいるだけで穏やかな気持ちになることでした。誰もが馬のコータロー（耕太郎）から離れられなくなってしまいました。笹が大好きで、パリパリと音をたててよく食べます。眠さえあれば草を食べ、ポロポロとウンコを落とします。草色の丸いウンコで子供たちが日を丸くして驚いていました。それでも鋤を引いて耕拡するとき、馬そりを引くとき、コータローはキリリとたくましい顔になります。

村の春祭りで年配の方が「昔はどこの家にも馬が一頭いた」と話しておられました。

耕拡機やトラクターの導入で馬のいる暮らしが急激に消えてしまいましたが、50年あまり前までは、馬耕が普通に行われていたのですね。田植えが近づいて忙しくなると、「三軒から馬三頭集めて、一緒に代掻きをしよった。馬が暖れてくると餅米を食わせて働かせた。それでもへばるとお茶の葉を食べさせ、元気をだせた」そうです。

馬耕や馬搬といった化石燃料に頼らない生活も試みてみたいですが、それよりも、ただ馬と一緒に生きることが、なにかとても大切なことのような気がします。動物学者のジェーン・グドールが「私たち人間は動物の一部です」と語っていますが、馬と暮らすことは人間が動物の仲間であることを思い出すきっかけになるかもしれません。

木を植えてから私たちは「森の一部」として生きてきました。だけど「動物の一部」という意識はあまりありませんでした。これからは馬だけでなくニワトリやヤギなどと一緒に、にぎやかに暮らしたいと思います。

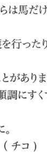
できれば小さな馬車で、木魂と上木魂を行ったり来たりできるようになったらいいなと夢を見ています。

この高原はまだ朝夕かなり冷え込むことがあります。霜が降りないかと心配で眠れない日もありましたが、今年は遅霜もなく、順調にすくすくと新芽が伸びています。ゆうべから雨で穀が輝きを増しています。

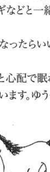
皆さまに良いお茶をお届けできますように。

ことしもどうぞよろしくお願いいたします。（チコ）

＊はじめて描いた馬シリーズ



作　ラビ、ウ、ウ、クマ
あまりにも長き知らない間がよく出ている。
みんなが笑うのでなぜかいけず載せます。（ち）



作　オト
一見ラビよりよ半だけど、足が地下足袋？
長らくく見ると大？